

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	なごりの雫（新体詩）：文苑
Author(s)	藤輪
Citation	龍南會雜誌， 8 1： 7 1 - 7 6
Issue date	1900-09-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4999
Right	

夕べの空の水の清きよりも清く、左手に三枝の白百合もち、頭に七つの星をかざせり。われは彼の女の名とはんとて近よりぬ。されど彼の女はうつむきたるまゝに行き過ぎぬ。われは其の名を問ひ得ざるを、名残おほくおもひ候ひぬ。

君がやさしき文に返すとて、われは幾度か硯に向ひ候ひぬれど、かき亂されど心は思ふやうに筆のすゝみかねたれば、なめげなる事のみ申え侍りぬ。されど、君尤め玉ふ勿れ、こは我が夢の如き心の迷ひに候ふなり。

今朝、まがきの下に咲きそめま朝かはの一片、つたなき文の中にまきとへ参らせぬ。君が手にふれんとき迄は、しをれであれどこそねんと参らせつ。

しはう

紫川兄へ

新体詩

なごりの雪

藤輪

望む光明と同うし、學の軒を同くあばら屋に營々、玉の露滋き曉に、殘月を愛づるの樂さ、松青く、波白く寄せ來る磯の夕に、明星の光さ昧ふの樂を共にしたるこそもありき。あるは影うすき夕月に、裏の芝青き小丘に、共に神に祈り、深夜恍茫たる天に輝く星を仰きつゝ、なさけなき孤兒や、哀れ病める寡婦の事など思ひて、世を慨きたるもありき。あるは、

春の曉に櫻花の影を汲みて、小川のほとりに、諸ふ牧童の歌を遠く聞きては、秋の村里遠く、月に小琴の清韻を聞きては、思はずも共に神と讚美する歌をうたひしきともありき。あはれ、かゝる親しみ深く而かも吾の兄となりて力となり、導きとなりし、二人の友の五高を卒へて東にかへるにいたく心動きたれば、はなむけにもかなき思ひて、ミーズの神の導き玉ふまにまに、うたひそのなす業を、吾もして見んさて、覺束ながらものしぬるものを。

清流たえぬ谷川の、

流れにかゝる水車、

いつも轉ぐれる月日なれば、

花はひかして散り失せて、

蔭は深山の木下路、

うすぐらきまで茂り生ひ、

樹々の緑は新らえく、

青葉に望み萌出で、

人はみどりの甘酒に、

うらみは獨り己が身よ。

緑の衣に着かへたる、

花陵の嵐心地よき、

小川の橋にたゝすみつ、

早太陽の影のいさよいて、

知らず傾く西の空、

いつしか暮雲潮のごと、

潮の流に掉して、

浮び出でたる明星の、

光の影を數ふれば、

早や一年よすぎさりて、

別れの宴會あゝこゝに、

春風ゆるく吹きそよぎ、

花にくれゆく朧夜も、

梧桐の一葉の音軽く、

さゝの雨降る秋の日も、

恵の露に酔ひしれて、

共に讚美を歌ひしが、

露いと滋き曉に、

ア、かの清き残月の、
松原青く波白き、

磯の夕の明星の、

自然の光に酔ひまれて、
共に讚美を歌ひまが。

神の御園の影うつる、
學の窓にもろどもに、
エデンの清樂夢みては、
神の恵を語らひて、
双の心にへだてなく、
清き陸をかはせしが。

神の御園にふさふさと、
實るふどうの木の下に、
不識かはしゝ口つけに、
み空の清き明星の、
かりの契は浅くとも、

底ひも知らぬ青淵の、
深き情のなからむや、

深き情に契りまど、

運命の風の吹き來ては、

人間こゝに力なく、

夕べかなしき里川の、

柳の蔭に行末を、

ちぎりて別る西の空、

見よ紫の雲いでて、

明星のかげあらはれぬ、

森の遠近分け入りて、

心なきてふ猿さへ、

夕は友を呼ぶとかよ、

暮れ行く空をなかりつゝ、

別れの橋にたゝずれば、

無限の思潮のごと、

小さき胸に湧くよ君

隅田の岸に花咲かば、

筑紫の春を思ひてよ、

筑波の峯に月澄まば、

つくしの秋を思ひてよ、

二つの路に別るとも、

情を寄せよ常し世に、

人間の力は弱けれど、

神の御園に日も月も、

信仰の道をたどり行く、

君かこゝろに湧き返る、

熱き情に弱き身も、

色まさりゆくうれしさよ、

堅盤の柏枯るゝとも、

君か情はどこしへに、

熱き情に溢れたる、

君よ山潮荒れ來り、

世渡る船のたちゆらき、

神の宮城しろをば思ふ時、

こゝにも思かよはせよ、

* * * * *

君か榮を今日こゝに、

神も喜びいますらむ、

吾胞もこゝろ清めつゝ、

人のこゝろをなぐさめて、

無限の思さそふなる、

讚美の曲を聲高く、

されど榮は曉の、

夢の醒めはて跡もなく、

うつろひ易き春の日の、

花の姿のそれよりも、

サタンの計略來るとき、

何日も嵐は吹きあれて、
人の世つねに荒ければ、

あはれ脆きは人間も、

夜半の嵐、朝の露、

いつと限りど知らされば、

春吹く風は心なし、

散り行く花もこゝろなし、

こゝろなき身のいかで君、

心なきみを惜しむべき、

たどひあへなく落つるとも、

またもや春のめぐりこん、

花は昔の花なれど、

人はむかえの人ならず、

絶えず希望のぞみの舟にのり、

力のかぎり勉めてよ、

神の恵にいささよく、
朝日かゝやく宮城どのの裡、
新の衣に粧ふべく、

柴の小車行きなやむ、

木曾の山路の峠徑も、

掉さす舟のかへるてふ、

富士の川波早き瀬も、

難しといふは越えがたき、

水にもあらず水よりも、

山にもあらず山よりも、

移り行く世と人はいふ、

神のみもとに世を渡る、

君がこゝろになにのその、

露をふみつゝ牧場路、

草を刈り行く跡みても、

願證ならずや、努力の、

うちに隠るゝ高き旨、
物の微なるに淺からぬ、
意義の奥を知り得なば、
草を刈る子も天國の、
同じ愛子の名はあるよ、

あはれ至愛の神の手に、
ゆたけき母の胸にある、
美なる乳房にすぎること、
生命の春のかぎりなき、
シオンの山より流れくる、
靈泉にこゝろ洗ひ行く、
君かはまれは顯證かに、
實に麗はまき春の花、
さかり短く散りぬども、
君か學術の花は世に、
薫りむなしく消えぬやも、

サタンの軍勢つよく、
功利の夢に人の世は、
正義の聲はありぬども、
理想の光、まだみえず、
福音すみにみちみちて、
國民生命にかへるまで、
ましぐらに行け勇ましく、

神の光榮のそのために、
譽は高き豫言者の、
十字の旗を推したてゝ、